

駅から少し離れた個人経営のカフェで、ぼくはマッチングアプリで知り合った成斗さんと初めて会った。

アプリでのやり取りの中で、ぼくはずっと言い出せずにいたことを、ある夜、意を決して打ち明けた。

『実は……ぼく、カントボーイで。女の子の部分がある。それでも、大丈夫ですか』って。

既読がついてから少し間があって、『全然大丈夫だよ。むしろ、君のことをもっと知りたいと思った』って返ってきた。その言葉が、どれだけぼくを救ってくれたか。

やってきた成斗さんはプロフィール写真のままの人懐っこい笑顔で、すっと伸びた背筋にふんわりとした自然な茶髪がよく似合っていて、実物は写真よりずっとかっこよかった。

「ごめん、待たせた？」

「いえ、ぼくも今来たところです」

「よかった。座ってもいい？」

「もちろんです」

向かいに腰を下ろした成斗さんは、明るくて距離感が近く、すぐに場の空気を和ませる。メッセージどおり話しやすく、自然と警戒心がほどけていった。

コーヒーを頼み、少し話したあと、彼が身を乗り出して言う。

「そういえば、昨日教えてくれた映画、帰ってから観たよ。面白かった」

「本当ですか？」

「うん。あの監督が好きなら、今度は別の作品も一緒に観たいな」

アプリで話したことをきちんと覚えてくれている。それだけのことが、ぼくには嬉しかった。

カントボーイだと打ち明けてからも、成斗さんの態度は変わらなかった。身体について無遠慮に尋ねてくることも、妙に気を遣うこともない。目の前にいるぼく自身を知ろうとしてくれているのだと思えた。

（この人なら、大丈夫かもしれない。）

初めて会ったばかりなのに、そう思うくらいには、
ぼくは彼を信用し始めていた。

「ちょっと面白いゲーム、しない？」

「ゲーム、ですか？」

「うん。実は僕、催眠術が使えるんだよね」

冗談めいた調子に、思わず笑ってしまう。

「本当ですか？」

「じゃあ、実際に体験してみる？」

「そうですね……お願いします」

深く考えずにそう答えたぼくに、成斗さんは穏やかに続けた。

「催眠術をかけるときに一つ注意点があるんだ」

「注意点、ですか？」

「そう。催眠術は一度始めたら、僕が解除するまで止められないんだ。意識はそのままだけど、身体も口も、僕の願いを断れなくなる。だから、最後までいくよ」

「そうなんですね。わかりました」

「じゃあ、楽にして。椅子に深く座って……目、閉じてみて」

「ここで、ですか？」

「大丈夫。誰も気にしてないしさ」

店内には他の客もいたけれど、その言葉に背中を押され、ぼくはそっと瞼を閉じた。

「今から僕の声だけ聞いて。ほかの音は遠くのBGMみたいにしてい」

不思議と、彼の声だけがくっきり耳に残る。

「そうそう……僕の言うことを、そのままやってね」

「はい……」

言われるほどに思考がゆっくりほどけていく。

「君は今から、僕の言葉に素直に応える。はいつて
言って、ちゃんとやるんだ。ほら、呼吸も自然に。
吸って……吐いて……」

胸が上下し、身体感覚ははっきりするのに、頭
はぼんやりしていく。

「いいね。そのまま……」

パチン、と成斗さんが指を鳴らした。

「……じゃあ」

「今でスイッチが入ったよ。もう僕の指示に従え
るね？」

「はい」

(……え?)

自分の返事に、少し遅れて気づいた。意識はある